

武庫川守による住民主体の武庫川づくりの現場から

吉田博昭・佐々木礼子(武庫川づくりと流域連携を進める会 I)

はじめに

兵庫県武庫川流域委員会を前身とする武庫川づくりと流域連携を進める会は、設立から10年にしてようやく流域委員会の提言書に記した「住民主体の武庫川づくり」をスタートさせた。今年度はその2年目である。気候変動の急加速を背景に自然の猛威に耐える武庫川に対し、情報と人材のシンクタンクである当会は、武庫川守として平常時から災害時に至るまで、あらゆる角度から流域環境の実態調査を行ない、広く情報を発信してきた。また、流域圏を流域住民と共に視察することで、流域のさまざまな生きものや魅力を発見し、さらには危険までを周知する企画も展開した。一方、「地域共有の財産」である武庫川固有の資源と流域圏の安全を守るために川づくりをリードする「武庫川守」を育成する「武庫川講座」を4年間企画してきた。これらの活動を通して、流域の実態を最も把握している住民自らが情報を収集し、行政に提供することが、より効率的できめ細やかな川づくりにつながり、流域住民が川づくりに参画する一つのきっかけにもなる。また、武庫川への理解をさらに深めるためには、他流域との交流・連携を進めて、他流域から新たな知見を得ることで、武庫川との相違を知り、そこからさまざまな問題の要因を探り、独りよがりの川づくりに陥らないよう心掛けることができる。



武庫川づくりと流域連携を進める会の主な活動

① 武庫川守としての活動

武庫川守は、「今現在、武庫川で起きていること」を目で確かめ、記録し、現場で出会った人の声を聞きとりながら、「机上の空論に陥らない」をモットーに収集した様々な情報を整理し、必要に応じて河川管理者との対応なども図ってきた。そして、「現場で出会った地域住民の声」「武庫川に何を求めているのか」「アユの遡上や生きものは」・・・、武庫川の今を未整理なままでも写真やその他の記録として残し、河川改修事業によって毎日に変わっていく武庫川が、本当に市民が望む姿になっていこうとしているのかどうかを見守っている。

そのなかで、平成23年に策定された武庫川水系河川整備計画は順調に実施事業へと進められてきた。その過程で、河川整備計画にはなかった新名神高速道路工事に伴う河川改修事業や大雨による出水に起因する河川改修事業などが優先的に進行した。一方、河川整備計画に係る実施事業では計画変更や遅れも見られ、進捗状況を慎重に見守る必要性を感じるようになった。



② 武庫川ウォッチング

当会設立当初から、生きものが専門の法西先生を団長に、武庫川流域圏における、生きものから歴

史、文化、河川施設にみる河川工学、等々、ありとあらゆるものを流域圏の環境と称して、年4回の視察・ウォッチングを実施してきた。そうして、何時の間にか人間も観察の対象にしてしまった。今では、地質、河川改修工事現場にまで観察対象が広がり、環境・生きもの・人の暮らしに至るウォッチングの膨大な観察記録は、モニタリングデータとして蓄積し、地域の経年環境変化まで分かるようになってきている。訪問先の地域団体との合同観察会も率先して実施することで、関心領域の拡大と環境の多面的な理解につなげ、流域連携のきっかけづくりと連携の環の拡張にも寄与している。



③ 武庫川講座～武庫川づくり実践講座

確かな住民参加を川づくりに反映させるために、これまで「武庫川流域圏ネットワーク」「武庫川市民学会」と当会の3団体は連携して住民の参画と協働による武庫川づくりに取り組んできた。これらを司るコアの運営会員の高齢化問題は、どこのNPOにおいても直面している課題である。この課題を払拭し、武庫川づくりを担える人材育成を目指した武庫川講座は、昨年度までに3年間の座学を終え、今年1年間でフィールドでの実践活動を無事終えることができた。昨年の「共生のひろば」は、3年間の座学のまとめとして4つのグループの研究発表のステージとなった。その結果、武庫川講座の4グループは名誉館長賞を受賞した。今年を受講者自らが武庫川づくりの企画立案から実践ができる力量を養い、その実施結果を「共生のひろば」に出展するに至った。



④ 平成30年度のトピック「円山川流域圏の視察および千種川圏域との他流域間交流連携」 ・円山川流域圏視察

武庫川では下流域で潮止め堰をはじめとする多くの堰と上流のダムによって水量が制限されて多くの魚類の遡上の妨げとなっている。これらの課題解決に向けたヒントを求めて円山川流域圏を訪問、視察した。蓼川全面魚道・加陽湿地・久久比神社・コウノトリ郷公園・ハチゴロウの戸島湿地・田結湿地を1日で巡る駆け足の視察になった。行く先々で口を揃えたように言われた言葉が「自然との共生」であった。国土の狭い日本では、人の立ち入ることを許さない「保護区」の設定は難しい、自然と折り合いをつけて暮らすしか道はないことを学んだ。

圃場整備、河川改修という大規模な公共工事と一度は絶滅したコウノトリの保護増殖、復帰の取り組みが同時期に重なった。このような時期に野生のコウノトリ「ハチゴロウ」が飛来したことに端を発し、行政と流域住民が共にコウノトリを再生しながら治水・利水・環境のバランスを図ってきた。おおわざ(大技)は行政、こわざ(小技)は市民と役割分担し、行政間、行政と住民、住民間の利害調整を熱心な地域のリーダーが担い、行政と市民の中間支援が功を奏した。武庫川で考えている中間支援組織の先行事例として習うべきところが多々あった。



・千種川圏域との交流

千種川フォーラムに参加し、ひとはくの三橋先生が「千種川は環境学習の教科書である」といわれた由縁が分かった。

千種川圏域清流づくり委員会と武庫川流域委員会の交流に端を発し、「武庫川づくりと流域連携を進

める会」発足時の記念フォーラムは横山正先生の基調講演で始まった。それ以来の付き合いであるが、千種川フォーラムの発表を聞いて、先進的なこともあったが、多様な団体・個人・地域とのネットワークが活動継続の大きな力であったことが判った。

45集も発刊し続けた千種川生態集の蓄積がかけがえのない資料となり、今年発表された千種高校の生物調査は千種川生態集なしに実現できなかった調査であったことが判明した。武庫川における水質調査記録も大切な資産であることを再認識した。

川を好きになること、記録を残すことこそが次世代につなげる最も重要なツールであることを再認識できた。

フォーラムに参加して武庫川とおかれた状況は違っても、千種川には習うべきことが沢山あり、少し距離はあるが、可能な範囲で交流できることを願っている。

おわりに

重機を駆使して河川改修を展開する行政の「おおわざ（大技）」と人手で細やかに水辺の水生生物が集える河川環境を整える草の根活動的な市民の「こわざ（小技）」が連携した川づくりこそが住民の参画と協働ならでの最も素晴らしく強靱な「武庫川づくり」であると考えている。今後も「安心して心地良く暮らせる、川づくり・まちづくり」を目指して活動を継続していきたい。

小さな川づくり・小さな自然再生は地元の人々の理解と協力無しには難しい。関係を構築するまでには粘り強く取り組む人の尽力に頼ることは否めない。地域住民自らが、小さなことをコツコツと積み重ねて行政の隙間を埋めるこわざ（小技）と、地域で少しずつ溜め込んだ情報が将来の川づくり・まちづくりにとって欠かせない大きな力を発揮するとともに、これらの資源は次世代に残すべき重要な情報となるだろう。